

モデル事業名	「瀬戸谷再発見」宝物を磨き上げる交流・定住促進事業
活動団体名	瀬戸谷生き生きフォーラム
ホームページ	http://www.setoya.com/ikiiki_f/
所属/ 担当者名	瀬戸谷生き生きフォーラム 会長 小田 稔彦
連絡先	藤枝市本郷876番地 藤の瀬会館内 電話 054-639-0120 oda@setoya.com
活動地域	静岡県藤枝市瀬戸谷地区

● 活動地域の概要

- ・瀬戸谷地区は、藤枝市の最北部に位置し、市の面積の40% 人口2%（合併前データ）
- ・標高は100～870mと起伏に富んだ細長い地形をしている典型的な中山間地域
- ・昭和40年3月 集落数：9集落 800戸 4,595人 高齢化率12% 小中学生1,006人
- ・平成21年2月 現在7集落 805戸 2,751人 高齢化率31% 小中学生 188人
- ・瀬戸谷地区に関する公共交通の状況：平成20年度末路線バス撤退に伴い自主運行バス瀬戸谷ゆらく線、大久保上滝沢線平成21年開設 H19年6.1人/台の乗車数（平日）2.0人/台の乗車数（休日）
- ・産業：茶の生産額 平成18年298千万円5%の減少 平成10年315千万円（藤枝市）瀬戸谷地区が藤枝市の栽培面積の50%を占めている。



位置図



土地所有者の不在化が進む中山間地域



空き家と放置農地の状況

● 活動地域の課題

農林業が基幹産業であるが、谷間の急峻な地形から機械化も進まず、特産のお茶や木材価格の低迷により若者の市内外への流出は著しい、人口もピーク時の半分となり、1集落では子どももなく限界集落となっており、空き家や空き地、耕作放棄地が顕在化してきている。

平成20年度の幼稚園卒園児も6名と数年後には都市部の小学校との統合、中学校の複式学級も予想される。

若者の定住が進まず、このままでは近い将来コミュニティの維持困難になるなど、地域活力の低下が課題となっている。

平成元年ごろに整備した活性化施設従事者の高齢化による後継者不足が顕著である。

● 活動の内容

【全体】

- ・定住促進： アドバイザー講演会、空き家空き地調査、アンケート調査、せとやに住もうパンフレット作成、相談コーナー開設、定住促進施策検討（空き地空き家を活用したプログラム作り：天空の回廊）
- ・地域ブランドづくり（地域資源の磨き上げ）： 活性化施設の課題調査、講演会の開催、地域ブランド開発会議の開催、アドバイザー招致、若者の活躍の場づくり、情報発信講座の開催
- ・自主運行バスの取り組み： 自主運行バスのシステム構築、運行検討会議、利用促進策の検討と実施（H21年度運行を開始）
- ・地域資源の再発見： 地域の宝物探し（中学生）、農業自然体験プログラムの開発とリーダー養成と実践、まちむら交流センターの機能検討と開設、瀬戸谷ブランド（せとやコロッケ、お茶など）の情報発信と人材育成
- ・情報発信：活動だよりの発行月1回、インターネットのホームページの開設

【直近1年間の進捗など】

地域ブランド（農産物や加工品、愛の聖地化）の情報発信活動（お茶、ミカン、お米やせとやコロッケなど）
 生き生きフォーラム組織の法人化の検討（アドバイザー招致、ワークショップ6回開催など）
 地域人材育成（中学校での農業福祉太鼓体験出前授業、イベントの参画）
 空家活用の体験活動（空き家再生プロジェクト）

● 活動の成果

【全体】

平成 20 年度から本格的に行っている地域ブランドづくりでは「せとやコロッケ」のイメージづくりに成功し多くの来客者を瀬戸谷地区に誘導できている状態となっている。マスコミの取材などを通じて大きく瀬戸谷地区が取り上げられ、瀬戸谷が元気な地区として市民からも評価を受け、活動を共にするせとやコロッケの会が「元気なまち藤枝づくり」に貢献した組織に選定された。選定の理由としてユニークなアイデアで、地域と藤枝市を PR し、地域おこしに貢献している。B 級グルメの仕掛け人として、県内に知れ渡る優れた取り組みをしていると評価を受けた。H21 年度においてはこの成果を地区の活性化施設の関係者が学ぶ講座を開設し他の地区からも受講者が参加した。

自主運行バスについての取組については、2 年目のラッピングバスの取り組みを通じて地域に様々な方法で呼びかけや市からの取り組み評価をいただき、大幅に削減した運行本数や乗り継ぎ場所の整備などの見直しを図りようやく高齢者にも定着の兆しが見られる。今後も地域内外の応援者の理解も得て活動を継続していき、利用者数や運賃収入%アップを通じてバス運行の存続を図っていく。

定住促進については、田舎暮らしをしたいという都市部の住民の方々が数十名に及び情報を欲しいとの要望を受けている状態で、フォーラムの取り組みや働きかけによって市においても来年度から空家・空き地バンクの開設に向けてフォーラムや自治会からの情報収集を行っている。

生き生きフォーラムが行ってきた取り組みが評価を受け、市において中山間地域の活性化計画の策定が住民参加で進められており、来年度より実施に移される運びとなった。

【直近 1 年間の成果など】

瀬戸谷ブランドづくりではお茶の取り組みに次いで、ミカンの生産も盛んなことからミカンに関わる取り組み（昔、子供たちがミカンの収穫作業のお手伝い時に行っていた「ミカンの皮とぼし」を競技化）を行ったところ、地域内外やマスコミからも注目を受け大きな情報発信となったことや地域の次代を担う中学生の育成をしようと中学校と協力し、授業に参加して農業体験・福祉活動への参加や講演会などを行った。その成果として中学生が地域最大のまちむら交流イベント（11 月）に全校生徒（60 名）で参画し、約半年間の活動の成果を示してくれた。この取り組みは地区住民の活性化に向けての大きな刺激になってくれ、このイベントの集客数も昨年と比較し 20%増加し、経済効果（農産物販売 10%アップ全商品完売）も見られた。

定住促進の取り組みでは広報活動を通じた紹介で子供世帯のいない限界集落の空き家に若者夫婦が移り住んでくれたことがあげられる。



自主運行バス・幼稚園児の協力やバザー寄付などでラッピング完成



駅前商店街での地域 PR

● 今後の課題及び展望

【課題】

活動を通じて生き生きフォーラム組織の強化と継続を図るために、NPO などの法人化を目指していたが瀬戸谷地区全世帯の会員組織のため、全体の賛同は得られず組織検討は継続となった。当初の目的でもある「地域資源を活用した地域の活性化や自立した地域活動を行っていく」ためには、経済活動を伴う地域マネジメントが重要となることから今後の課題として残った。

昨年の地域の基幹産業のお茶の凍霜被害もあり価格の低下から耕作放棄地が増大、その影響からイノシシなどの鳥獣被害が拡大してきており、新たな地域課題として顕在化してきている。

【展望】

専門委員会（農業、福祉など）の設置やフォーラム委員の増加などの組織の強化は図れ、市においても中山間地域の活性化計画に基づく支援活動も来年度からはじまるため、活動の促進が図れる。

瀬戸谷地区の活動を参考に市内他の中山間地区でも取り組みが始まり、連携した取り組みに発展する要素もあり全市の関わりも必要なことから望ましい展開となってきている。